

油流出事故対策使用実例

事例	事故状況	処置
1	大型トラックの接触事故が発生し、内1台が側道の市道に転落し大破した。これにより、約150Lの軽油とエンジンオイルが水道水取水河川に流出。	土壌で流出を止め、散水車にJ-M（この時用意されたJ-Mは16缶）を数十倍に希釈した洗浄剤を積み込み散水した（希釈水は、川の水をポンプでくみ上げて使用） その他の汚染箇所は、高圧洗浄機で洗浄した。水道局員立会いの下、少しずつ土壌を撤去し、川に流入させ観察したが、油紋の発生もなく、河川の水も白濁しない事を確認した上で、水道局が放流する事に同意し、全ての作業を完了した。
2	廃油の蓄積場・ドラム缶の集積場が廃油で真っ黒になっており、管轄の市役所や県公害センターから清掃するよう勧告を受けていた。	長年堆積した砂やゴミ等をスコップであらかじめ除去し、被洗浄物を出来るだけ少なくした。150LのポリバケツにJ-Mを15倍希釈した希釈液を創り、高圧洗浄機で汚れのひどい所から順次洗浄し、特に汚れがひどい所はデッキブラシで擦り洗い、J-Mの希釈液を散水し、しばらく放置後、洗浄除去した。仕上げとして、水だけで表面に残った洗剤と汚れを軽くすすぎ作業完了とした。その後側溝に油分が浮かないか200m下流まで油紋が発生していない事を確認した。
3	11トン車の横転事故が発生。3本の車軸と車輪及びオイルパン、燃料タンクが脱落し、200Lの軽油とエンジンオイルが路上に流出した。幸い田んぼ等への流出はなかったが、雨天の為、軽油やオイルの流出が心配された。	道路株式会社所有の散水車にJ-Mの15倍希釈液を作り、路面洗浄をした。また、高圧洗浄機で側溝及び土手・分離帯など、油で汚染された部分の洗浄、横転したトラックの洗浄をした。
4	団地内食品工場の重油タンクのフロートスイッチの故障により、やく600Lの重油が流出した。公害センター・消防署・団地管理者立会いの下、工場内路面・側溝・流出河川の清掃を行ったが、河川に至る暗渠配水管（口径300mmヒューム管）の管壁に付いた重油が少しずつ溶けだし、河川に油紋を形成した。	浚渫車の出動を要請し、J-Mを100倍以上に希釈し、暗渠配管の清掃を行った。 路面は高圧洗浄機を使用し洗浄を行った。
5	高速道路での事故により、燃料・エンジンオイル等が上水取水の河川に流入した。これにより、取水は停止されオイルヘンスを張っている。	高圧洗浄機を使用し、50倍程度に希釈したJ-Mを散布し洗浄した。その後中和剤の様な白濁現象や臭気もなく、作業終了と同時に取水再開となった。

事例	事故状況	処置
6	<p>高速道路での車両事故により、燃料やオイルが漏出し、雨水配水管を経て、約1ヘクタールの田んぼに流出した。</p>	<p>現地では面積が広い事から、消防車を手配し、田んぼ全体にJ - Mの100倍希釈液を散布した。 その後も稲は順調に生育し、特に問題はなかった。</p>
7	<p>中河川で油流出事故があり、消防署持参の中和剤を散布したところ、河川が白濁したため、河川管理者から中和剤散布の中止を要請された。</p>	<p>30～50倍に希釈したJ - Mを高圧洗浄機で散布した。 河川の白濁も無く、処理を完了した。</p>
8	<p>コンデンサーを製造する工場では、1日120?の油交じりの排水が出ており、これを地下タンクに貯留し、毎週土曜日に4?のバキュームカーで本工場の排水処理施設に投入していた。しかし、この排水を投入した事により、曝気槽が黒色に変色し、処理水の悪化を引き起こした。</p>	<p>地下タンク(30?)に25?の排水を貯留。1.5kwの攪拌用ブローラーを設置。25?の排水に対して、0.7%の濃度で、J - M18L缶10缶投入し、3日間エア攪拌する。 攪拌終了後、12?の排水を本工場排水施設に投入。その後、施設には影響なく順調に完了した。</p> <p>今までは、含油排水3?投入で、曝気槽の黒色変化という処理水の悪化があった。しかし、J - Mを投入して攪拌した排水を12?投入しても、その後施設には変化は見られなかった。この事は、施設が長時間標準活性汚泥法(好気性菌による微生物処理)である事から、微生物分解が良好という事の証明となった。</p>